



IGA腎症の主な初期症状

- 尿中に潜血やたんぱくがみつかるとともに、早期は潜血だけのことも多い
- 風邪をひいたときなどに肉眼でわかる血尿が出る
- 腎機能の低下とともに、疲れやすさ、食欲低下、息切れ、夜間の多尿などもみられる

情報の窓口

- IGA腎症根治療法ネットワーク
http://www.iga.gr.jp
 - 日本腎臓学会
http://www.jpn.or.jp
- (腎臓病の専門医や診療がトヨタ(株) The Asahi Shinbun)

IGA腎症 不安と決断 情報編 根治めざした治療法も

IGA腎症は、腎臓内の糸球体に免疫フロンクインのIGAが沈着して起る病気で、代表的な慢性腎臓病である糸球体腎炎の半数近くを占め、日本人に多い。原因は不明で、難治性疾患の指定を受けている。初期には自覚症状はなく、健診などで尿中に血液やたんぱくが検出されて見つかるところが多い。患者の年代は子どもから高齢者まで幅広く、10代と40代にやや多い傾向がある。毎年約1万人が新たにIGA腎症と診断されているという推定もある。

30年ほど前は、治療をしてもあまり悪化しない病気で考えられていた。しかし、その後の研究で、2割は症状が軽く、自然に治るものがある一方、腎機能が低下して10年後には約2割、20年後には約4割が腎不全に陥ってしまっていることがわかってきた。

治療は、降圧剤などで血圧をコントロールし、病気が進行するにしない、塩分やたんぱくの制限などの食事療法と運動の制限、腎機能を保護する薬などが使われる。

だが、これらでは完治は難しかった。「患者を生きる 不安と決断」で取り上げた馬桃(うまづ)摘出・スクロイドパルス併用療法は、現在IG腎症根治療ネットワーク代表を務める仙台社会保険病院腎セクターの堀田修・前セクター長が88年、患者の馬桃に白い点のような腫がついてきたときに注目を始めた。IGAを作る指令を出す馬桃の摘出とスクロイドの点滴を組み合わせた治療だ。これまでに約1500人に治療を実施した堀田さんによると、尿潜血が見つかると3年以上以内に治療を始めれば、8割以上が尿潜血も尿たんぱくも消える「寛解」になり、その状態が長く続き、完治も見込めることがわかってきた。ただし、潜血確認から7年以上たつていると寛解率は半分以下になるといふ。

この治療法は、01年に論文が発表されてから、多くの施設で行われている。

木村健一郎・聖リリアン大教授(腎臓高血圧内科)はこの治療を受けた場合とそうでない場合を無作為に比較した臨床研究がなす。国際評価は確立されていないという。厚生労働省の研究班では、スクロイドのパルス療法だけを施した場合と比べる臨床研究を進めていて、その結果が注目されている。いずれにしても早期発見が大切で、健診などで尿の異常を指摘されたら、専門医の診察を受けることが重要だ。(本多昭彦)

▼ご意見・体験は、<メール> iryo-k@asahi.comへ。